

## 階級社会がアブナイ!? - *Harry Potter*と英国教育事情

水 尾 文 子 (英国女性小説)

2000年5月、ローラ・スペンス (Laura Spence) という18歳の高校生が英国中の注目を浴びることになった。英国北部のコンプリヘンシブ (comprehensive school, 総合中等学校)<sup>1</sup> 出身のローラは、前年、オックスフォード大学を受験したが、その年の暮れに不合格通知を受け取っていた。ローラが通っていた学校の校長は、成績優秀なローラが不合格になったのは、ローラがコンプリヘンシブの出身者であることが原因ではないかとマスコミに訴えたのである。この訴えは、総選挙を控えた政界に持ち込まれ、2000年夏、後に「ローラ・スペンス事件」として国民の記憶に残る一大議論を巻き起こした。与党労働党の財務大臣ゴードン・ブラウン (Gordon Brown) がローラの不合格についてのマスコミ報道を取り上げ、階級社会と結びついたオックスフォード大学のエリート意識を非難する発言をしたことが引き金となり、労働党の閣僚達 (David Blunkett, Robin Cook) が次々とブラウンの発言を支持したのだ。オックスフォード大学は、合格判定には成績以外の要素は一切考慮されていないと主張、2000年6月15日の上院議会討論会では、野党自由民主党議員のジェンキンス卿 (Lord Jenkins of Hillhead) がブラウン発言を非難し、同じく野党保守党議員のヤング夫人 (Baroness Young) も、労働党は一生徒を政治目的のために利用しているとブラウン発言を批判した。政界でのこの騒動は、真相が明らかにならないまま収束していった。結局、ローラは、奨学金を得てアメリカのハーバード大学に進学し、後に、当時沈黙を守っていたローラ自身がマスコミの取材で、面接で上手く話せなかったのが不合格の要因ではないかと、彼女の不合格が一大騒動に発展したことに大きな戸惑いを見せた。

一生徒の大学不合格が政治家を巻き込んだこのような騒動に発展したのは、英国の教育システムが何世紀にもわたって階級の問題と密接に関わってきた背景に原因

---

1 あらゆる能力の子供が就学する学校である。グラマー・スクール (grammar school) やパブリック・スクール (public school) と比較し、階級・学力的に劣るとみなされる。

があると考えられる。オックスフォード、ケンブリッジといった名門大学に入学する生徒の多くは、圧倒的にパブリック・スクール（public school）出身者である。パブリック・スクールとは、上層中流階級以上の子弟を対象とした英国トップクラスの男子の寄宿制の名門私立校の総称である。その創立は古いもので14世紀（Winchester校）に遡る。元来、聖職者を目指す下層中流階級の子弟を対象に設立されたが、18世紀頃には、中流階級以上の家庭の子供が通う名門校になった。このようなパブリック・スクールの他に、現在は、女子の寄宿生の私立校などを含む全ての「私立学校（independent school）」を指すものとして、公立学校と区別して、パブリック・スクールという言葉が使われることが多い。英国内での「私立学校」の正確な数は把握されていないが、英国大使館の統計によれば、イングランドで私立学校に通う生徒の割合は全生徒の約7%、スコットランドにおいては約4%とも言われ、11歳あるいは13歳になると受験し進学する<sup>2</sup>。一方、ローラの通うコンプリヘンシブは、地域の全ての子供が入学できる学校である。以上のことから、英国社会では、私立学校に通う生徒とコンプリヘンシブに通う生徒の違いが、家庭の階級格差と結びつけて考えられやすい。真相はどうかであれ、英国最高学府の双壁の一つオックスフォード大学がコンプリヘンシブ出身者を不合格にしたという訴えにマスコミや政治家が飛びついたのには、このような背景があったのだ。

英国のパブリック・スクールは物語にしばしばとりあげられてきた。家柄と高い学力を併せ持つ限られた人間が通うため、新井潤美氏が『不機嫌なメアリー・ポピンズ—イギリス小説と映画から読む「階級」』に書いているように、別世界への憧れから、19世紀半ば頃より英国の子どもたちの間でパブリック・スクール<sup>3</sup>を舞台にした「学校もの」が多く読まれるようになったという。その元祖は、トマス・ヒューズ著『トム・ブラウンの学校生活』（1857）で、パブリック・スクール生活が顕著に描き出されている。新井氏は、更に、「学校もの」の隆盛を英国の中流階級層の拡大と関連づけて指摘している。産業革命以降、中流階級層が拡大するにつれて、子弟のパブリック・スクール入学を希望する親が増え、新しい寄宿学校が次々創設

---

2 (<http://www.uknow.or.jp/uknow/about/100faqs/qa07/htm>) を参照のこと。

3 ここで指す「パブリック・スクール」は、イギリスで一般的に解釈されている「有名な私立の寄宿学校」であると新井氏は書いている（199-200）。

された。19世紀半ばから、それまで家でガヴァネス（住み込みの女性家庭教師）に学んでいた上層中流以上の階級の家庭の娘を受け入れる女子専用のパブリック・スクールも創立された。これらの生徒を対象に、寄宿学校を舞台にした小説が19世紀末頃に次々と書かれるようになった。20世紀初めに、学校を舞台にした物語を載せた雑誌がいくつも出版され、最も人気のある「学校もの」と言われたのは、架空の男子寄宿学校を舞台にした『ビリー・バンター』シリーズで、一方、架空の女子寄宿学校を舞台にして人気があったのは、1940年代から50年代に次々と出版されたイーニッド・ブライトンによる「学校もの」であったという。

第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 1997以下『賢者の石』)の出版以来、世界的な人気を博しているJ. K. ローリング(J.K.Rowling)の『ハリー・ポッター』シリーズもまた、「学校もの」の流れをくむとしばしば指摘される(新井198)。主人公ハリー(Harry)が入学するホグワーツ魔法魔術学校(Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry)は、英国のパブリック・スクールそのもので<sup>4</sup>、これまで何世紀にもわたって階級の問題と密接に関わってきた英国の教育システムがこの小説に反映されていると言える。しかし同時に、『ハリー・ポッター』シリーズには、時代と共に変遷してきた近年の英国教育事情もまた反映されている。冒頭で紹介したローラ・スペンス事件にも見られるように、英国の教育システムの特徴であった階級間の線引きについて、近年変化が生じている点である。本論ではその2点が『ハリー・ポッター』シリーズのどのような点に見られるのかをまとめてみたい。

第一巻『賢者の石』は、中流階級の価値観に対する嘲笑を込めた描写で始まる。

Mr and Mrs Dursley, of number four, Privet Drive, were proud to say that they were perfectly normal, thank you very much. They were the last people you'd expect to be involved in anything strange or mysterious, because they just didn't hold with such nonsense. (7)

「どこからみてもまともな人間です」と自負し、「不可解なこと」を嫌うダーズリー

---

4 明らかな共通点は団体生活を通じた教育である。パブリック・スクールについては、井村元道『英国パブリック・スクール物語』他を参照してほしい。

夫妻—「ノーマル（標準）」の状態を誇りにして生活する様子は、典型的な英国中流階級層の姿を浮き彫りにしている。歴史的には、18世紀半ばから19世紀にかけて起こった産業革命以後、階級間の人口移動が頻繁になり膨張したのが中流階級で、貴族や地主で構成される上流階級層と労働者で構成される下層階級層の間に挟まれる。実際、ダーズリー家は、ロンドン郊外のサリー州にある「寝室が四部屋ある」(32)家に住み、父親のダーズリー氏は会社の重役(7)という典型的な中流階級の家庭である。ダーズリー一家には、「誰かに知られてしまったら一巻の終わり」(7)と思うほどの秘密があり、それはダーズリー夫人には「ダーズリー家の家風とはまるっきり正反対の(“unDursleyish”）」(7)魔法使いの妹夫婦がいることなのだと言語は続く。“unDursleyish”は作者ローリングによる造語で、「ダーズリー(“Dursley”）」を「ノーマル」と言い換えてみると、この中流階級家庭の「ノーマル」への異常なまでの執着と異なる価値観をもつ者(階級を含む)を排斥する姿勢が表されている。ホグワーツからハリー宛に届いた入学許可の手紙を執拗なまでに焼き捨て続けるダーズリー氏の姿(30-32)がこの姿勢を滑稽に体现している。

しかし、物語の中心人物はこのダーズリー夫妻ではなく、中流階級の基準に入らないとして彼らから異端視されている魔法使いのハリーである。物語は、ハリーが入学するホグワーツを舞台に展開していく。ホグワーツ(=パブリック・スクール)では、魔法族がマグル(人間)に対して特権階級とみなされる。それが明らかに分かるのは、次の場面である。11歳になったハリーの元に、森の番人ハグリッド(Hagrid)がホグワーツへの入学許可証を持ってやってくる。しかし、ハリーの保護者である叔父、ダーズリー氏はハリーのホグワーツ入学を認めない。そんなダーズリー氏にハグリッドが「ハリーの名前は生まれた時から入学名簿に載っている」(47)と言う。実際、生徒の家柄を重んじるパブリック・スクールでは、親が子供の出生時に出身のパブリック・スクールに届け出るのである。「十数年後に入学するからよろしく」という予約である。もちろん、ホグワーツと違い、パブリック・スクールでは、家柄だけでなく入学試験に合格しなければ入学を許可されないのだが。ハリーの両親はホグワーツ出身で、ハリーは出自からいってもホグワーツ入学の資格があることになる。

19世紀に英国の首相を務めたディズレーリ(Benjamin Disraeli, 1804-1881)は、「英国は2つの国民から成っている」(井野瀬28)と、労働者(下層)階級と中流階級との太い線引きを「異なった人種(国民)」と表現したが、小説にも、「種類

(*sort, kind*)」という言葉を用いて、魔法族の視点から、魔法族とマグルの線引きがされている。『賢者の石』で、マグルであるダーズリー夫妻の元に暮らすハリーのところに、ホグワーツの入学許可証を持って訪れたハグリッドは、ホグワーツでは「同じ仲間の子供たち (*youngsters of his own sort*)」(48)と過ごすことになる。ハリーに言う。また、ダイアゴン横丁 (*Diagon Alley*) で同級生となるドラコ・マルフォイ (*Draco Malfoy*) に偶然出会ったハリーは、マルフォイに「同族 (*our kind*)」(61)かと尋ねられ、自分も魔法族だと答えると、マルフォイは、「他の連中 (“*the other sort*” つまりマグル) は入学させるべきじゃないと思うよ。他の連中は僕たちとは違う。僕たちのやり方を知るように育てられていないんだもの」(61)と言う。

第2巻『秘密の部屋』(*Harry Potter and the Chamber of Secrets*) では、この種族の線引きが「血統 (“*blood*”)」という言葉で何度も登場する。第2巻で話題になる秘密の部屋とは、ホグワーツを創設した魔法使いの1人スリザリンが、他の3人の魔法使い達と対立しホグワーツを去ることになった際、学校内に怪物を閉じ込めた部屋である。4人の魔法使いの対立の原因は、スリザリンが、ホグワーツでは魔法族のみ受け入れようと主張したことだった。秘密の部屋の扉はスリザリンの後継者が現れた時に開けられマグルの生徒が追放されるとスリザリンは言い残してホグワーツを去る。ハリーがホグワーツの2年生になった新学期、秘密の部屋の扉が開かれ…と物語は展開していくのだが、「穢れた血 (“*Mudblood*”)」、「純血 (“*pure-blood*”)」、「混血 (“*half-blood*”)」という単語が盛んに登場する。ホグワーツで優等生のハーマイオニー (*Hermione*) は、マグルであるために、自らの「純血」を誇るマルフォイ(127)から「穢れた血」(123, 243)と罵倒され、ホグワーツで劣等生のネヴィル (*Neville*) は「純血」(201)であることが分かり、この2人には、パブリック・スクールの入学条件である「家柄」と「学力」が反比例して描かれている。(歯科医を父に持つハーマイオニーは、現実の社会では中流階級に属し、「穢れた血」ではないと思われるが。) また、ハリー達が突き止めたスリザリンの継承者で50年前にホグワーツの生徒だったトム・リドル (*Tom Riddle*) が「混血」と分かったり(264, 340)と、一部の登場人物の血統に対するこだわりが浮き彫りになると同時に、「血統」の価値に読者は首を傾げたくはないだろうか。

英国人の階級間の線引きについても一つ紹介したい。英国では、生活習慣、趣味に至るまで全てにおいて階級の名札がついてくると言われる<sup>5</sup>が、互いの階級の趣味、習慣については無関心である。菱田信彦氏がマグルの世界に対する魔法族の

無知、無関心について書いている。例えば、ハリーの親友ロン (Ron) は、サッカーというスポーツを知らない。英国では、嗜むスポーツも階級によって分かれ、サッカーは労働者階級が楽しむスポーツだと思われてきたという。『ハリー・ポッター』シリーズに描かれる魔法族のスポーツ、クイディッチと上流階級のスポーツであるポロとの共通点を指摘し、菱田氏は、魔法族のロンがサッカーを知らないというエピソードは彼らの階級の違いを示すために意図的に挿入されたものであると書いている(33)。現実の英国社会での階級間に見られる互いの生活習慣に対する無関心についても、このように、物語における魔法族とマグルに垣間見ることができる。

以上のように、階級との接点に焦点を当てて『ハリー・ポッター』シリーズに「学校もの」の特徴を見てきたが、『ハリー・ポッター』シリーズには、同時に、現代の英国の教育システムを反映した特徴も見られる。それは、富山多佳夫氏の言葉を借りれば、「hybridity (人種の混成)」<sup>6</sup>である。 hogwarts には、優等生であるハリーの親友ハーマイオニーはじめマグルの生徒が在籍している。ハーマイオニーを作者ローリングは自身の分身と考えているとローリングの伝記には記されている (Smith 41)。実は、ローリングも、冒頭で述べたローラ・スペンスと同じ経験をしている。地元のコンプリヘンシブに通っていたローリングが、A レベルで優秀な成績をとりオックスフォード大学を受験したものの不合格になったことは、ハリポタ・ファンには広く知られた事実である。ローリングの伝記によると、ローリングを指導したコンプリヘンシブの教師もまた、コンプリヘンシブ出身であることがローリングの不合格の原因ではないかと考えていたという (Kirk 42)。二十数年前のローリングの不合格の原因もローラ・スペンス同様真相は分からないが、冒頭で紹介したローラ・スペンスの一件との大きな違いは、二十数年前には、マスコミに訴えそれが大きく取り上げられるなど想像できなかったことだろう。コンプリヘン

---

5 Andrew Adonis and Stephen Pollard, *A Class Act: the Myth of Britain's Classless Society* (London: Hamish Hamilton, 1997)。階級についてはこれまでたくさんの本が出版されているが、Jilly Cooper, *Class: A View from Middle England* (London: Eyre Methuen, 1979)、Jeremy Paxman, *The English: A Portrait of a People* (London: Penguin Books, 1999) は比較的読みやすい。

6 2005年12月27日に開催された英語圏文化研究会第3回大会(於 大阪市立大学)での富山氏の講演「『ロード・オブ・ザ・リングス』と『ハリー・ポッター』—その文学技法とイデオロギー」の中での発言である。

シブの生徒がオックスフォード大学を受験することの厳しさを、二十数年前の英国社会は、階級格差の観点から暗黙の了解として認識していたと言えるかもしれない。

魔法族とマグルとの混成は、hogwartsにマグルの生徒が学ぶということだけではない。「血統」に焦点が当てられる第2巻『秘密の部屋』では、純血に執着するマルフォイに向かってロンが、「最近のほとんどの魔法使いが混血なんだよ。マグルと結婚しなけりゃ魔法族は死に絶えてるよ」(127-28)と言い、英国社会における階級間の結婚の増加を示唆している。それはまた、多民族、多文化を特徴とする現代の英国社会を反映していると言える。1999年の統計では、英国の総人口に占める移民の割合は6.8%、インド人、パキスタン人、カリブ系黒人、アフリカ系黒人、バングラデシュ人、中国人から成るとい<sup>7</sup>。移民は、『ハリー・ポッター』シリーズにも登場する。ハリーの初恋の相手として第3巻『アズカバンの囚人』 (*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*) からその存在が注目されるチョウ・チャン (Cho Chang) である。チョウは、hogwartsでレイヴンクロー (寮) に所属するハリーの1年上級生で、ハリーと初めて出会うのは、『アズカバンの囚人』に描かれるレイヴンクローとグリフィンドールとのクィディッチの試合である。レイヴンクローのクィディッチ・チームのシーカー、チョウを見たハリーは、とてもかわいいと思い、腹部におかしな感覚を覚える(192)。続く第4巻『炎のゴブレット』 (*Harry Potter and the Goblet of Fire*) で、ハリーは、hogwartsのクリスマス・パーティーにチョウをダンスの相手として誘う。チョウの国籍は小説には明記されていないが、名前からアジア系であることが容易に推測できる。ここには、上で述べた魔法族とマグル、つまり、階級に関する「人種の混成」とは違う、西洋と東洋の「人種の混成」が示され、近年の英国社会における階級のみならず民族・文化の「混成」を反映していると言える。

ほんの一部だが、階級社会と密接に結びついてきた英国の教育システムとその変遷を『ハリー・ポッター』シリーズに見てきた。この他のたくさんの発見は読者の皆さんに委ねたい、と書いて締めくくるのはいささか無責任ではあるが、ここで一旦筆を擱くことにする。

---

7 [http://www.uknow.or.jp/be/s\\_topics/facts/01.htm](http://www.uknow.or.jp/be/s_topics/facts/01.htm) を参照のこと。

参考文献

- Adonis, Andrew, and Stephen Pollard. *A Class Act: the Myth of Britain's Classless Society*. London: Hamish Hamilton, 1997.
- Kirk, Connie Ann. *J. K. Rowling: A Biography*. Westport, CT: Greenwood Press, 2003.
- Rowling, J. K., *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury, 1997.
- . *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury, 1998.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. London: Bloomsbury, 2000.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury, 2001.
- Smith, Sean. *J. K. Rowling: the Genius Behind Harry Potter*. London: Arrow, 2002.
- 新井潤美『不機嫌なメアリー・ポピンズ—イギリス小説と映画から読む「階級」』（平凡社新書、2005）
- 井野瀬久美恵『イギリス文化史入門』（昭和堂、1994）
- 井村元道『英国パブリック・スクール物語』（丸善ライブラリー、1993）
- 川本静子、松村昌家編『ヴィクトリア女王—ジェンダー、王権、表象』（ミネルヴァ書房、2006）
- 菱田信彦「ハリー・ポッターとイギリス階級社会」『英語圏児童文学研究 Tinker Bell』第51号（日本イギリス児童文学学会）2006 Feb. 32-46.